

[概要]

戦後日本の郊外住宅地は、男性が都市部へ通勤し、女性が地域や家庭を担うという性別分業を前提に形成されてきた。郊外地域の社会関係に関する研究は、専業主婦や男性退職者に焦点が当てられてきた一方で、就業女性の地域における社会関係は十分に検討されていない。本研究では、男性を比較対象に、郊外地域において十分に位置づけられてこなかった就業女性の地域社会における社会関係の形成過程を明らかにすることで、郊外地域の構造的特徴を再考することを目的とする。調査の結果、男性は在職中に地域との関わりが希薄である一方、退職前後の時間的余裕を契機に活動へ参加する傾向が強いことが確認された。これに対し女性は、在職中から子育てや婦人部などを通じて地域との関係を形成しており、退職後の活動参加はそれらの延長として生じていた。こうした男女差は、郊外社会において男性が職場、女性が地域や家庭を担うという性別役割分業の影響と考えられる。また、男性と同じような就業経験を持つ女性も地域社会との関わりは、子育てなどの家庭生活を媒介として形成されることから、郊外社会は主婦が家庭や子育てに関する女性としての役割を担うことで成り立つのではなく、女性という性が家庭や子育てなどの生活役割を果たす構造であると考えられる。そのため、主婦ではない就業している女性も、郊外社会では女性としての役割を果たすことを期待されることになると思われる。

キーワード：ジェンダー、性別役割分業、郊外地域、コミュニティ活動